



NO.6

昭和63年(1988)11月1日

編集・発行

津田左右吉博士顕彰会

(美濃加茂市太田町3425-1)
T E L. 0574-25-4141

津田博士は心の財産

会長 土屋 保

わが国の偉大な歴史学者津田左右吉博士生誕のこの地で幸せな生活ができますことはこの上ない喜びであります。

「郷土の生んだ偉大な人物は」と聞かれて私達はためらうことなく「津田左右吉博士です」とお答えできることは私達の大きな誇りであり心の財産でもあります。

昭和六十二年から津田博士研究の第一人者でありました尾関公見先生のとを受けついで私がこの顕彰会の会長に就任させていただきましてから皆さん方の温かいご支援により順調に顕彰活動がすすみますことを心から感謝申し上げます。

かえりみますと、この顕彰会は昭和五十九年二月に設立しましてから早くも丸五年が経過しようとしております。

当時いや以前から津田博士を心から崇拜し哲学、思想、歴史、文芸等博士の巾広い学問に深い関心をもち、またその研究に意を注がれていた市内の多くの関係各位に心から敬意を申し上げますとともに、その中心的存在でありました尾関先生の情熱に対し強い感激の念を禁じえません。

加えて、この会の趣旨にご賛同をいただき力強いあとおしをしていただいております顧問の渡辺博万市長さんをはじめ、ご理解ある市内の多くの皆さんにあらためて厚くお礼申し上げます。

お蔭で、本会の顕彰会活動も現在までに

- 一、「郷土の光津田左右吉博士」記念誌の発刊
- 二、博士の遺品展写真展の開催

- 三、顕彰会だよりの発行
 - 四、津田賞少年作文の募集
 - 五、生誕の地石碑設置
 - 六、博士の石造記念碑（モニュメント）図書館前に建立
- など数多くの実績と素晴らしい成果をあげるに至っております。

私がいまさら博士のご功績を申し上げるまでもないことですが、（昭和二十三年に帝國学士院会員となられ、同二十三年に早稲田大学名誉教授に就任、同二十四年には文化勲章を授与、同三十五年には美濃加茂市名誉市民第一号に推挙されるなど）そのご遺徳は私達にとってはかり知れないものがあります。

学問に生涯を捧げられた先生の偉大さは私達にとってかけがえのない財宝であり、その数々のご業績を顕彰しつつ後世に末永く伝えていくことは私達の大きな責務であると考えます。



どうか今後とも、この顕彰会の輪が会員をはじめ関係の皆さんのご協力により市内全

事業計画

- ・ 広報の発行
顕彰会だより No. 6
- ・ 会費の徴収、会員の募集
- ・ 第4回「津田左右吉賞」の実施
とき 昭和63年12月10日(日)
ところ 美濃加茂市中央公民館
- ・ 記念事業の計画
- ・ その他

域に広がり顕彰活動が一層高まりますことを心から念願しごあいさつといたします。

第三回 津田左右吉賞 受賞作品

〔最優秀賞〕

人のためにつくす

山之上小六年 小藤 健宏

人はなんのために生きるの
だろう。ぼくは、ふと六年生
になって考えたことがありま
す。

ただなんとなく、この世の
中で生きたくありません。大
人になったとき、これだけは
自分がしっかりなしとげれた
と主張できる仕事がしたいと
考えています。

学校の生活の中で、いろい
ろ友だちの話を聞いて、ぼく
は、やっぱり人のために役立
つ人間になろうと考えました。
どんなことで人々のために
役立つか、それは、人々が健
康で幸福なくらしができるこ
とです。だから、そのために
は、医者になりたいと考えて
います。

医科大学に入学することは、
今までのような勉強では、い
けないので一日に三時間以上
は自主勉強にとりくまないと
いけないと思っています。こ
の勉強をずっとまだ十年以上
も続けていくためにじょうぶ

な体が必要です。

ぼくは、まず体をきたえる
ことから始めています。六年
生になって、毎朝六時に起きて
家の近くの道をマラソンで走り
ます。体をきたえて、将来の
夢を実現したい。毎朝のマラ
ソンで六時に起きることは、
そんなに苦しいことではない
けれど、走りたくないなあ
と思うときも、時々ある。

医者になろうとした動機は、
まだ、他にもあります。それ
は、ぼくが赤んぼうのとき、
ひどい病気にかかりました。
母があわてて、医院へ連れて
いってくれました。その先生
は女医さんでした。とてもや
さしく、親切に、ていねいに
診察してくださったそうです。
そしたら、すぐにひどかった
病気もうそのようになおり、
元気になったそうです。母か
らこの話を聞いてとても、ぼ
くは、感動しました。

ぼくも、その先生のように、
やさしくて、どんな病気でも
治してしまう医者になりたい
と強く思いました。病気になる
って苦しんでいる人の気持ち
のわかる医者になるのがねが

いす。患者の心の苦しみを
でわかる人間として立派な
人でなければいけないのでは
ないかと思えます。

この前、学級の読書の時間
に野口英世の伝記を読みまし
た。英世が医者として、黄熱
病に苦しむ、アフリカの人々
のために一生をささげようと
した、その気持ちは、今のぼ
くの気持ちをゆきよりました。
ふと自分の生き方と比べて
みたとき、ぼくは、自分でも
わかっていて短所があります。
それは、心のあまえです。何
でも少しぐらいいいだろう
とすぐに楽な方へ考えていく
ことです。あまえた心がすぐ
におきます。このあまえた心
に打ちかつことが課題です。

「医者になるには、とても大
変なことだが、それ以上に人
のためにつくそうとすること
は、大変にむづかしい仕事だ
よ。」と父に言われました。ぼ
くは、この父の言葉の本当の
意味が、少しわかるような気
がします。

〔優秀賞〕

私の先生

太田小六年 渡辺 純子

私のクラスの担任の先生を

紹介します。名前は「荊谷民
子」。年令のことになると、
「先生はいつまでも二十代で
す。」と言って本当のことを教
えてくださいませんが、多分
私のお母さんと同じくらいだ
と思います。でも、子供が三人
もいるなんてとても思えませ
ん。先生の話されることを聞
いたり、行動を見たりしてい
ると疲れを知らないスピード
感にあふれた先生という感じ
だからです。

私たちのクラスづくりのた
め、そして太田小の六年生を
育てあげようと日々がんばっ
てみえる姿が私にはよく分か
ります。

先生は算数が得意なのかと
ても分かりやすく教えて下さ
います。難しい「割合」や、
「比」なども全員が分かるま
で説明をくり返されます。だ
から今私達のクラスにきつと
算数のきらいな子はいないと
思います。先生の授業を通し
て私達が学んだことは、一つ
の課題に全力投球して自分な
りの考えをもつこと、そして、
意見交流する中で自分として
確かな考えをつかむことです。
また先生は、私達が考えた一
人一人の考えをととても大切に

し、授業の中で生かしてくだ
さいます。だからこそみんな
一生けん命考えるのかもしれ
ません。

先生が一人一人を大切に
してくださるのは、授業ばかり
ではありません。私達は毎日
「心の扉」という生活ノート
を書き続けています。がんば
ったことを書けば、一緒に喜
んでくださるし、悩み事を書
けばノートいっぱい赤ペン
をいれてくださいます。実際
に問題が起きたりすると先生
は、絶対に暴力でおさえたり、
人前で叱ったりなさいません。

私達のクラスは「団結」を
目標に、四月から仲の良いク
ラス作りに励んできました。
太陽の時間、先生と一緒に汗
まみれになって遊んだり、友
達のように語り合う時間もつ
くってきました。そのおかげ
で特に女子のチームワークは日
に日によくなり、笑顔でだれと
でも話せるふん囲気がクラス
中に、ただようようになりま
した。私自身、とても明るく
なったような気がします。

私達、一人一人を大切に、
時には厳しく指導してくださ
るそんな先生が、私達は大好
きなのです。

〔優秀賞〕

ふる里の光

三和小六年 市原 恵理

「はやく。はやくホタルを見に行こ。」妹が私達をせかします。「まだ出てないと思うよ。」五月下旬にホタルを見に行くなんて、出ているはずがないと思いましたが。おばあちゃん、妹、弟、そして私で行きました。橋のそばに来ました。「あっ、あそこ。」妹がさげびました。妹の指さす方に目を向けると、ボカッ、たった一つ小さな光ですが確かにホタルです。知らないうちに弟も私も橋の方へ走り出ていました。ボカッ、また光りました。「わーっ。もう出ていたのか。」私はホタルをずっと見ていました。すると、妹と弟がホタルをつかまえました。草むらの中にとまっていたホタルの方へ走り出しました。「だめっ。つかまえたらいかんよ。」と私は注意しました。

つきりと見せてくれました。でも、つかまえた時のホタルの光は、空を自由に飛んでいる時の光より、少し暗く悲しそうでした。私は、またそつと空へにがしてあげました。その時から、私はこの美しい光を持つホタルを大切にしようと思えました。妹と弟は、「ホタルがほしい。つかまえて。」と言いました。つかまえて、家に持って帰れば、ホタルはきつと死んでしまいます。でも、妹と弟が、ほしい、ほしいというさかかったの、じゃあ、つかまえてあげるけど、見たらすぐ逃がしてあげるんやよ。」と言って、つかまえてあげました。「おばあちゃんが、「むかしは竹ぼうきをふり回すと、それにホタルがいつぱいいたんやよ。それぐらいホタルがおったのに、今は少なくなっちゃったねえ。」と教えてくれました。つかまえたホタルをそつとにがしてあげました。どうして今は、少なくなっちゃったんだらう。私も、一度でいいからほうきでつかまえられるほどたくさんのホタルを見てみたいです。

豊かな天稟

尾関 公見

昭和三十五年五月美濃加茂市名譽市民に推戴された津田博士は、その表彰式に臨む為、同年十日、岐阜駅に着かれ、出迎いの渡辺市長さんの車で午後三時太田着、望川樓に投宿されました。

心配していたお身体の調子もよく大変お元気であり、恵那の秀峯を望む恵峯の間で休息されました。

春の長い日は夕食を済ませられても尚外界は明るく、木曾川の滔々と流れる夕景を御覧になり、「素晴らしい故郷の景観だ」と仰言つて、しみじみ鑑賞されていました。

この時お伴の栗田先生が私に、「津田先生は学問上の偉大なお仕事ばかりでなく、美術についても、音楽にも大変御造詣の深い方です。」とお話し下さったが、迂闊な私は「はあそうですか。」と答えたばかりでそれ以上深くお尋ねすることなく時を過ぎました。

その後津田左右吉全集三十三巻が発刊され、博士の広い領域に亘る学問の大系を始め各種論叢、更に一般には公開されない日記、日信等も加え

られました。

之によって今まで全く知らなかつたお若い頃の煩悶、苦惱と共に、又血のにじむ御努力の積み重ねが克明に記されていて始めて解りました。

しかし広く深い貴重な著述は、専門的な素養もなく、不勉強な私には仲々読解がむづかしく、遅々として進まないことをはがゆく感じています。偶々二十二巻の論叢の部をひもといて「はっ／＼」と気付いたのは前編二十四項の「音楽俗話」の一項でした。

明治三十八年八月「をんな」第五巻第八号から翌年八月まで十回と互り連載されたもので、博士三十二才の時です。標題のつけ方から考えても専門家の講義式ではなく、極めて庶民的で親しみ易く、内容も大上段に構えたというように堅苦しいものでなく平易に説かれています。

明治二十年代頃から次第に西洋音楽が理解され、鑑賞する人も多くなったようですが、博士は明治三十三年十一月、明治音楽会の会員になり西洋近代音楽に近づき始められたのです。

これより先、ワグナーの交

響楽を聴き、その和声の巾広く深く人の心をゆさぶること

に感動されたことについて、津田博士研究者である大室幹雄先生は、「恐るべき感受性の持主」と感嘆されています。

音楽俗話の第一項、「管絃楽の組織」の最初にある記事を転記します。(原文のまま)

(イ)「ちよつと見ようなら、音楽のリズム(節奏)は子供にもわかるので、マーチなどを聴くと直きに手拍子足拍子でまねをする。之も音楽のおもしろさには違ひない。」

(ロ)「また大抵の人はそのリズム(旋律)を聴いてよろこぶ。あの節まはしがよかつた杯とはよく人のいふことである。之も音楽のおもしろさである。」

(ハ)「しかしハーモニー(和声)のおもしろさを味はふ人は、(殊に単音の俗曲に耳なれた邦人には)甚だ少い。」

(ニ)かういふやうな形式上のおもしろさを感じる人も、真に楽のあらはす感情を会得する人は極めて少ない。

(ホ)複雑な西楽を味はうには之を聴くに多少の知識の上の準備がある……」

(ヘ)「音楽に全く門外漢である

ものがこんな話をしようとするのも、実際自分が音楽について何か知らうと思つても知る便利が甚だ少ないのを感じたにつけ、世間と同じ関心を抱いている人もあらうかと思ふからである」と……

聞くところによると博士は国内に適当な指導書がなく全て独学で、英独の原書で研究されたようであります。

更にオペラ、ワグネルの楽劇、モザルト、音楽の形式と其の表情、家庭の音楽……等々の解説が展開されます。

終戦後、日本の音楽は極度に進歩し、大衆化したと考えられますが明治三十年代、未だ洋楽の普及していなかつた時代にかように卓見を持って説かれたことも驚異の天賦の才があつたからと考えます。

「博士の人と学問とはどこをとつても超人的といわねばならぬ」と坂本太郎博士は称賛されていますが、その学問の大系は千古に變ゆる富士山の如く万人から敬仰されますが、その裾野は無限に広く雄大であるように、天賦の才も又限りなく広いことの一部を紹介しました。

現在、津田博士顕彰会の会員数は、下米田町を中心に約600名。博士の業績をたたえ、後世へ伝えようとする各種記念事業をはじめいろいろな活動を行っています。私たちはひとりでも多くのみなさんに理解をいた

新会員募集中

茂市社会教育課内・津田左右吉博士

だいて、現在の輪をもっと大きくしたいと考えています。詳細及び申し込みは、美濃加

士顕彰会電話二五一四一四一
まで。なお入会金は五百円で
その後の年会費は三百円です。